様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２８３

研究課題名（和文）英国ルネサンス演劇における演劇的手法としての手紙

研究課題名（英文）Letters as a Dramatic Device in English Renaissance Theatre

研究代表者
太田　耕人（OTA, Kojin）

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：４０１６８９３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　英国演劇の黎明期から17世紀までの現存する英語劇をHarbage, “Annals of English Drama: 975-1700”の推定執筆年に基づいて調査し、初期版本と現代版本を照合して手紙が現れる箇所を網羅的に分析した。
英国演劇における「手紙」の初出は "Fulgens and Lucrece" (1497) だが、その後しばらく例外的な作品をのぞき用いられなかった。1580年代に73例、1590年代に191例と頻出するようになり、偽造・誤配・誤読されることで劇的契機をつくりだす手法として発展した。

研究成果の概要（英文）：This exhaustive research is on the dramatic use of letters in extent English plays written from the 10th century to the end of the 16th century, with an emphasis on early modern drama. The analysis was conducted on all the examples of the words “letter” and “paper” in English drama written during the period, based on Harbage’s “Annals of English Drama: 975-1700”.
It was not until “Fulgens and Lucrece”was written in 1497 that a letter as a missive communication was introduced into English drama. Letters were, however, seldom used in drama until the 1570s. In the 1580s, 73 examples are found, and in the 1590s the number jumped to 191 examples, when letters established themselves as a dramatic device: forged, misdelivered, or misread letters are used to create a crucial moment in dramatic action.

研究分野：英国初期近代演劇

キーワード：英国初期近代演劇　手紙　シェイクスピア　劇的手法　early modern theatre　letter　paper　dramatic device

１．研究開始当初の背景

(1) 16世紀の英国では、識字率の高まり、地方都市への馬車の定期運行で、遠隔地への通信手段として手紙が急速に普及した。手紙をめぐる研究はJames Daybell, “Recent Studies in Sixteenth-century Letters”, *English Literary Renaissance* 35 (2005)が概観するように、この20年間で急に脚光を浴びるようになった。

(2) それを反映して、演劇にも手紙が取り入れられたことに着目し、Lynne Magunusson, *Shakespeare and Social Dialogue*, Oxford University Press, 2008は、当時の手紙の流行と書簡術を考察してシェイクスピア劇を論じたが、書簡術と関係づけた研究はそれ以降進んでいない。

(3) Alan Stewart, *Shakespeare's Letters*, Oxford University Press, 2008が、シェイクスピア作品に出てくる手紙について初の包括的研究になると期待されたが、自らの前著 *Letterwriting in Renaissance England* (2004)を踏まえて当時の社会における手紙の流通に関心を寄せ、作品を照らし返したが、劇中での手紙の機能について秩序だった分析は行わなかった。

(4) どの先行研究をみても、英国演劇における「手紙」の初出、何年頃から多用されたか等の問題について基礎調査が行われておらず、手紙の劇的手法としての発展についての組織だった研究は着手されていなかった。

２．研究の目的

(1) 英国演劇に手紙が現れた初例を確定する。

(2) 英国演劇で利用される手紙の使用頻度の変遷を調査する。

(3) 演劇的手法としての手紙の機能を作品分析し分類する。

(4) 演劇的手法としての手紙についての特徴を観察し、作家ごと、時代ごとに、どのような傾向や変化がみられるかを検証する。

３．研究の方法

申請時の想定では、英国初期近代演劇にあたる1560-1642年の調査だったが、英国演劇における「手紙」の初出がそれ以前であることが判明したため、中世劇まで範囲を拡大して、975-1600年の現存する戯曲を対象とした。

Alfred Harbage, *Annals of English Drama: 975-1700*の推定執筆年に基づいて、作家別コンコーダンスや、LION,などのデジタルテクストも利用して、ESTCとリンクしたEBBOのデジタル画像、大英図書館所蔵の初期版本（のファクシミリ）を調べて、”letter”, “paper”, “epistle”の用例を調査した。

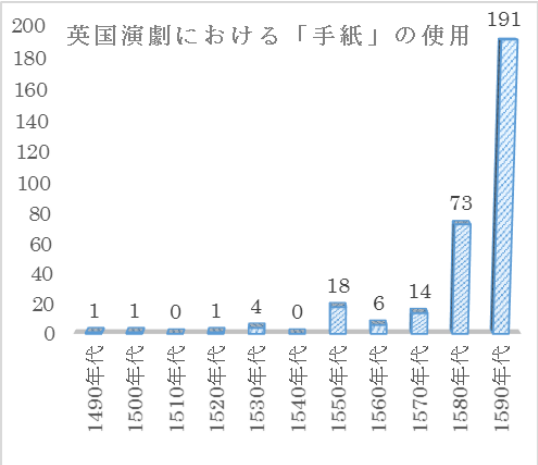
見つかった用例については、それが「手紙」の意味であるかを前後の文脈から確認し、可能な場合は、現代の学術的に編纂された版本や全集と照合し、異本の存在にも注意を払った。

４．研究成果

(1) 中世の典礼劇，サイクル劇などでは，当初 “letter” は神の力や奇跡をしめす「文字」の意が多く，やがて布告，令状など「公文書」の意味で使われた。しかし，手紙を「(その場にいない）差出人が特定の受取人（たち）にたいして，何らかの情報を個人的に通信するため送る書面」と定義すると，「手紙」と呼べる“letter”の用例は見当たらない。識字率が低かった中世の民衆の劇に，手紙が現われないのは当然であろう。また，単純明快な寓意的図式を好む道徳劇には，手紙を利用した複雑な筋立ては必要なかった。

(2) 英国演劇に「手紙」が初めて現れるのは，1497 年の『フルゲンスとルクリース』であることが確定できた。ルネサンスの人文学の洗礼を受けて，ギリシア・ローマ演劇を知る知識人が，ある程度の複雑さをそなえた劇を書いて，手紙が英国演劇に現われたと考えられる。

(3) 英語で書かれた、現存する各年代の戯曲のなかに、「手紙」(missive communication)の意を表す”letter”または”paper”, “epistle”が何例現れたかを単純なグラフにすると以下のようになる。



時代が下がるほど、戯曲の数も多く現存しているため、この数字だけから軽々に判断することはできないが、1570 年代の 14 例から 1580 年代の 73 例への急激な増加があり、また 1590 年単年で 59 例（これを含めて 1590 年代は 191 例になる）が見つかることを考えると、1580 年代後半に英国演劇において、手紙を劇的手法として導入する

動きが急激に広まったことは疑いようがない。

(4) 注意しなければならないのは、1550 年代に記録されている 18 例の用例だろう。これらはすべて、Jane Lumely, *Iphigenia in Aulis* (Trans. Euripides) による。「英語で書かれた」戯曲を対象としたため、エウリピデスの翻訳として知られるこの劇を含むことになったが、この劇にみられる用例は英国演劇における手紙の使用の先駆けというより、古代ギリシア演劇における手紙の使用を例示するものでしかない。むしろ、こうした翻訳がされたにもかかわらず、英国演劇自体での手紙の使用が進まなかったことは、いかに当時の英国演劇において手紙への関心が低かったかということを表している。

(5) 1570 年代までは、英国演劇における手紙の利用は、やはりギリシア・ローマ演劇を知っていた作者（たとえば George Gascoign など）が書いた、いわゆる academic drama を中心に展開したといってよいだろう。

(6) シェイクスピアの劇にあらわれる手紙を、Moroney や Barish の先駆的研究も参照して考察すると、シェイクスピアの劇にはおおよそ 130 通の手紙が出てくる。そのうち、約 90 通はたしかに舞台で目撃され、読み上げられるものは 44 通あると数えられる（どこまでを手紙と見なすかについては異見がありえるため、この数が確定したものとはいえない）。

(7) 44 通の手紙のうち、文体からいえば、26 通が散文、18 通が韻文。内容からいえば、44 通の約３分の２がラヴレターである。恋文は韻文で書かれるのがふつうだったが、特殊なものとして散文の恋文が５分の１ある。ちなみに、散文で恋文を書いているのは、『恋の骨折り損』の Armado、『ウィンザーの陽気な女房たち』の Falstaff、『十二夜』で Malvolio をだます Maria など、道化的または喜劇的な人物たちである。

(8) 経路を特定することはできないが、シェイクスピアの手紙の利用が、当時流布していたであろう西洋古典劇の影響を間接的にせよ、こうむっていたことも交流しておきたい。すでに古代ギリシアのエウリピデスにその例がある。『ヒッポリュトス』における偽の内容の手紙は、その後多くの英国ルネサンス劇において、使われる手法の先駆けであり、参考にされたと思われる。『十二夜』において、Malvolio が陥れられる偽手紙も、この喜劇的変奏といえるかもしれない。

(9) エウリピデス劇の断片の『ステネボイア』も—もとになった伝説の筋立てから類推して—手紙を活用している。材源であるベレロポンテースの伝説では、この者を殺害するようにと認めた手紙をもたされて、ベレロポンテースは遣いに出される。みずからの生命を絶つ命令をしるした、このような手紙を、本人がそれと知らずに運ぶとき、その手紙は deadly letter あるいは Bellerophon's letter と呼ばれる。『ハムレット』で、主人公が王に deadly letter（この手紙をもつ者を処刑するように指示）を持たされてイングランドに送られるのは、材源である Saxo Grammaticus, *Historiae Danicae* に見えているとはいえ、この類型に属する。

(10) ロマンス喜劇にはさかんに恋文のモチーフがあらわれるが、当初は筋を望ましい方向へ手際よく導くための機械的機能を担っていることが多かった。Robert Greene のロマンスには手紙が頻出するが、便宜的に（そして不自然に）筋を転回する仕掛けとして、用いられている。たとえば *Mamillia* (1583/4)では、Pharicles が恋人の女性とやりとりした手紙を彼女の父に見せることで、自らの誠実さを証明して結婚を許される。また、*Greenes Never Too Late* (1590)の結末では、貞淑な妻からの愛の手紙が放蕩者の亭主を改心させる。さらに *Friar Bacon and Friar Bungay* (1589)でも、やはり最後に唐突に Margaret のもとに婚約者 Lacie が突然スペイン人の女性と結婚したと知らせる手紙が 100 ポンドとともに届き、マーガレットは俗世を捨てて出家する、という思いがけない転回が起こる。

(11) ロマンスの比較的早い舞台化の例でありながら、手紙が複雑な機能をもった注目すべき例は、作者不詳の劇 *Fair Em* (1590)である。マンチェスターの粉屋の娘 Mariana に男から来た手紙を、Blanch は嫉妬してびりびりに引き裂くが、マリアナはそれをつなぎ合わせ、Sir Robert とあるのが、じつは William 征服王の偽名だと見やぶる。Lubeck というれっきとした恋人のいるマリアナは、ブランチと王との間を取りもつことで、王の望みとブランチの激しい嫉妬を両方とも、みごと解決することに成功する。

(12) この手紙の扱われ方は、やがて『ヴェローナの二紳士』(1593)でジュリアが、侍女ルーセッタのまえで意地をはって、プロテュースからの手紙を破り捨て、あとから繋ぎあわせる場面に引き継がれる。この場面は、材源であるポルトガルの Jorge de Montemayor, *Diana Enamorada* で、Felismena が Don Felix の恋文を侍女から受けとる箇所にもとづいているが、手紙を破るという劇的

所作はシェイクスピアがくわえたもので、*Fair Em* や類似の場面がみられる散文ロマンスから取り入れたと推測できる。

(13) 16 世紀末になると、〈あいまいな手紙〉が劇のなかで重要なはたらきをする。Christopher Marlowe, *Edward II* (1592)で、Mortimer Junior はエドワード暗殺について、ラテン語のあいまいな手紙を刺客に携えさせる。どこで区切って読むかをあいまいにしておくことで、後からこの手紙が発見されても、王殺しを指示した証拠にはなるまい、というわけである。

(14)　手紙のあいまいさは、句読点のような語学的要素のみから生まれるわけではない。現実世界で手紙が正しく機能するためには、おおよそ次の４つの条件を満たしていることが必要だと思われる。

① 正しい差出人がいて真正な署名や捺印のあること
② 途中で奪われたりせずに正しい宛名に配達されること
③ 適切な配達人あるいは配達手段によって配達され、信書の秘密が洩れたり、書き換えられたり、配達が遅れたりしないこと
④ 正しい内容が誤解されない明確な表現で記されていること

劇のなかの手紙が、アクションを引き起こす場合は、必ずこの４つの格率のすくなくともどれか、あるいは二つ以上に違反していることがわかる。上のモーティマーの手紙でいうなら、文字の読めない刺客が携帯していることは(3)の「適切な配達人」という規準を満たさないし、句読点を欠いたあいまいな文章という点では(4)の「誤解されない明確な表現」に抵触することになる。

(15) 手紙のあいまいさをこのようにとらえるなら、Thomas Kyd, *The Spanish Tragedy* (1587)で、Hieronimo が落ちている手紙をみつけて、Bel-imperia が血で書いたという、その手紙の真偽を疑う(III. ii)のは当然だと言えよう。ヒエロニモの息子 Andrea を殺した下手人は、Balthazar と Lorenzo だと手紙には記してあるが、ヒエロニモは信じない。血で書かれたような異様な文書は「正しい差出人」を保証しないし、路上に落ちているというのは「適切な配達手段」ではなく、妹が兄を売る理由も「誤解されない明確な表現で記されている」とは言えないからである。

(16) こうしたあいまいな手紙に、シェイクスピアは磨きをかけ、やがて〈偽造された手紙〉(forged letters)の手法として結実させていくことになる。先に触れた『十二夜』でマルヴォーリオがひっかかる手紙(II. v)や、『ジュリアス・シーザー』でブルータスを決起させるきっかけになる手紙(II. i)は、そうして劇的手法としての手紙のすぐれた例となっている。

(17) これらの研究成果は、初期版本の調査に予想以上に手間取ったため、まだ論文として十分に発表されていない。今後、1600 年までの英国演劇における手紙の使用箇所をすべて、初期版本においても現代版本においても特定する形で、一覧表として発表するとともに、各時期もしくは各作品における手紙の使用例の分析を続け、数年以内に成果の公表を完了させる予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

<u>太田耕人</u>「英国初期近代演劇における演劇的手法としての手紙—英国演劇に「手紙」はいつ現われたのか？」、『京都教育大学紀要』No. 129 (2016), pp. 1-16.査読無

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

太田　耕人（OTA, Kojin）
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40168935

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：